



PREX NOW

No. 162

March
2007

財団法人 太平洋人材交流センター
Pacific Resource Exchange Center

contents

page 1 ●ニュース&レポート 1

7カ国からの研修参加者で
異文化交流が盛り上がる！

page 2 ●ニュース&レポート 2

初めてシニアコースリーダーを担当して

page 3 ●訪問先同行記

頑張れ!! アドベリー・プロジェクト

page 4 ●ニュース&レポート 3

中国西部地域の中小企業振興を支える
研修参加者たち

page 5 ●講師の声

文化の違いを乗り越え、
生産性向上活動の導入を目指す

page 6 ●PREXだより

事務局ニュース、コラム



われわれの使命は、
常に開発途上国にとって
有益な存在であり続けることです。



ニュース&レポート ①

News & Report

7カ国からの研修参加者で異文化交流が盛り上がる！ [関西経済連合会アセアン経営研修]

■ラオスから初めての参加！

これまでアセアン10カ国からのメンバー国で抜けているのはラオスとカンボジア。今年はラオスに焦点をあてて現地商工会議所と年初からアプローチを開始し、参加を頂くことができた。来年度はカンボジアへのアプローチに特化し、中期的には10カ国フルメンバーでの研修ができることを目指している。

■関西の元気な特徴ある中小企業を訪問！

西宮市の北斗電子工業は、スタッフの殆どが開発スタッフと言う開発型企業で専門性の高い計測電子機器を開発、製造している。技術力を武器に大企業ともwin-winの関係を構築している開発型オペレーションに研修参加者からもそのビジネスモデルに突っ込んだ質問が相次いだ。中野会長には新入社員を入れて研修参加者との懇談会の場まで設けて頂き、会長自らの経営理念まで話が弾んだ。

大阪市内にあるセンソユニコは婦人服、服飾雑貨のメーカーで顧客ターゲットを絞った自社ブランドを複数持ちながら他社との差別化をおこなっている。在庫管理にはITを積極的に利用し、経営に有効に活用している実績で関西IT百撰を受賞されている。そんな自社で工夫されたITの活用について各研修参加者からも自らの企業経営に応用できぬかと関心を集め、具体的なソフトのあり方まで話が進んだ。

中小企業集積地である東大阪市の吉野金属は東大阪ブランド(オンリーワン技術)認定製品となったトイレットペーパーカッター(キリコ)を開発、製造しているユニークな技術を持つ会社で、同社の産学連携の開発スタイルに日本でのインキュベーションのあり方を研修参加者には与えることができた。

又、中小企業向け資金調達では大阪信用金庫で融資の実態をメガバンクとの違いを学び、最近のトレンドとなっている無担保融資制度についてもこと細かに説明を受け、本店窓口業務まで見学させてもらい、研修参加者一同喜ぶ場面もあった。

■有馬温泉で日本文化に触れる

今回有馬温泉にて宿泊することにした。まずは2グループに分かれて観光資源、資産の切り口で自国アピールを行ってもらったところ、研修参加者同士の理解がより深まることになった。日本の旅館は初めての体験、畳で布団敷いて寝るのも初めて、もちろん大浴場も初めての初めてづくし。特に露天風呂は強烈な印象を与えた模様。

1週間の短い滞在にもかかわらず研修参加者相互の人的ネットワークはしっかりと構築され、異文化の7カ国交流が有馬温泉をキーワードに今後とも続いていくことを期待するとともに、今回御世話になりました関係先には改めて御礼申し上げます。

—国際交流部長 深田 進



紅葉の美しさに研修参加者びっくり。
有馬温泉近くの紅葉の名所にて。

関西経済連合会アセアン経営研修

◎実施期間：2006.11/27～12/1 ◎研修参加者：アセアン6カ国(インドネシア、マレーシア、ミャンマー、タイ、ベトナム、ラオス)とインドの企業経営者・幹部 12名 ◎委託元機関：社団法人 関西経済連合会 ◎内容：経営管理

お世話になった方々、企業・団体他 (講義・訪問順・敬称略)

滋賀大学経済学部 小田野純丸教授、大阪信用金庫、松下電器産業、松下エコテクノロジーセンター、北斗電子工業、センソユニコ、吉野金属



初めてシニアコースリーダーを担当して

[キルギス、ラオス、ベトナム 日本センタービジネスコース運営管理]

11月から12月にかけて3週間、キルギス、ラオス、ベトナム日本センター職員4名を対象に研修を実施した。今回は、以前PREXに出向経験のある末利シニアコースリーダーに担当して頂いた。以下、末利シニアコースリーダーからの寄稿を紹介する。

■キルギス、ラオス、ベトナムの概要

今回、私の担当した研修は、3カ国合同だった。キルギスは人口5百万人程度の農業と牧畜および食品加工と金の採掘を主要な産業とし、ラオスは人口6百万人の農業林業工業と水力発電、ベトナムは人口8千万人で農林水産と鉱業を主な産業としている。いずれも市場経済に移行しつつあり、国として中小企業の振興や起業に努力している。参加者は企業経営を中心とする研修を希望しており、PREXの得意とする分野だったので、多大な貢献ができたと思う。

■カリキュラム構成

研修は研修参加者の要望に応じて以下の4つの項目より構成した。

- ①日本の企業経営の特徴を学ぶ：京セラの経営理念「敬天愛人」、サラヤの環境経営、山喜の海外戦略、ナベルのビジネス成功の秘訣、マロニーの経営戦略、山岡金属のCSR、イトアンドの人材育成、山岡製作所の技術伝承など。
- ②日本センター類似の組織運営及び中小企業・起業支援・コンサルティングを学ぶ：京都産業21、大阪産業創造館。
- ③各国日本センター間の経験を共有化する。JICA本部での情報交換、コースリーダーを交えた意見交換会。
- ④日本の文化や生活、社会システムを学



京セラ片山様との集合写真。右端が筆者。

ぶ：京都市伝統産業振興館、東部中央卸売市場、パナソニックセンター、PREX職員宅へのホームビジット。

又、講演としては、クリエイションの内海社長に人材育成、組織運営、コンサル業務について、流通科学大学崔教授に日本の流通業界の動きを、又、東洋紡OBの福田様に経営理念のご講義を頂いた。

■3カ国日本センター職員の合同研修

今回の合同研修、各国個別に運営されているJICA日本センター同士の横の連携強化も意図したものである。JICAは各国日本センター職員に、①研修コースのプランナー、②研修コースの中で講師、③中小企業や起業の支援などのコンサルテーション等々多岐に亘る役割を期待している。幸い、全員英語が堪能だったので、研修中にも仲良く懇談し、一緒にショッピングなどを楽しむなど3カ国の人的ネットワークが出来上がり、今後メールなどでの情報交換など情報の共有化が進むものと思う。

■訪問先の新規開拓

関西を中心に日本の企業を広く海外に紹介する観点から、新しい企業5社にも訪問した。東京の安久工機、マロニー、イト



安久工機で田中社長の説明を熱心に聞き入る様子。

アンド、山岡製作所、箕面マーケットパークヴィソラである。いずれの企業も、CSR(企業の社会的責任)の一環として、喜んで研修参加者を受入れてくださった。

■PREXの発展に驚く

13年ぶりにPREXに帰ってきて驚いたことが多々ある。①1993年当時20件程度だった年間実施研修数が現在は40件程度まで倍増していること。②女性職員の方々がプロとして成長していたこと。③PREXへのJICAからの信頼が格段に大きくなっていること。委託件数が倍増したことは委託先からの信頼が厚いことの証である。又、職員数は当時と同じなので、生産性は2倍になったことになる。④依頼講師や訪問企業が格段に増加充実していること。企業のCSRが浸透してきたこともあろうが、PREX職員の地道な努力の結果であろう。⑤シニア専門家やシニアコースリーダー等、シニア世代を活用する制度を採用し、飛躍をめざしていることは、これから急増する団塊世代をうまく取り入れる心憎い施策といえる。大きく育ったPREXを見ることは卒業生としてはうれしい限りである。

—PREXシニアコースリーダー 末利 鏡意

キルギス、ラオス、ベトナム 日本センタービジネスコース運営管理

- ◎実施期間 2006.11/21～12/8
- ◎研修参加者 キルギス、ラオス、ベトナム日本センターの職員 計4名
- ◎委託元機関 独立行政法人 国際協力機構(JICA)大阪国際センター
- ◎内容 日本センターにおけるビジネスコースの運営を担当する現地職員を対象に、日本の企業経営の現場や中小企業向けサービス提供機関、流通業の現場などを紹介することで、日本の企業経営の特徴を理解してもらうと同時に、日本センターにおける運営手法の改善を目指し、日本における中小企業向けサービス提供機関における運営ノウハウを習得することを目的とする。

お世話になった方々、企業・団体他

(訪問順・組織順、敬称略)

エクセルインターナショナル 関顧問、福田卓司氏、京セラ、京都伝統産業青年会、京都伝統産業振興館、サラヤ、山喜、安久工機、パナソニックセンター東京、ナベル、京都産業21、クリエイション 内海政嘉代表、山岡金属工業、大阪産業創造館、流通科学大学 崔相鐵教授、箕面マーケットパーク visola、大阪市東部中央卸売市場、マロニー、イトアンド、山岡製作所

頑張れ!! アドベリー・プロジェクト

【マレーシア人事経理初任行政官研修】

先日実施した、「マレーシア中間管理職指導力研修」に続き、同じマレーシアの初任行政官を対象とした研修を実施した。昨年まで「マレーシア経営幹部研修」を実施していたが、研修希望者が増えてきたため、中間管理職対象と初任行政官対象の2つに分離し、各々の研修目的に沿った研修を実施することにしたものである。

今回は、マレーシアの中央省庁や地方省庁に属する初任行政官20名が、人材育成とプロジェクトマネジメントの理解を深めるために参加した。その中でプロジェクトマネジメントの事例研修として、関西の代表的な地域プロジェクトである、アドベリー・プロジェクトを視察することになった。アドベリーとは、滋賀県の琵琶湖西側にある安曇川町（現：高島市安曇川町）と、ブラックベリーの1種であるボイズンベリーを組み合わせた造語であり、滋賀県を中心に人気を伸ばしつつある、新しい名産品である。

■新しい名産品アドベリー

3週間に及ぶ研修も終盤になり、研修参加者は、労働倫理、経営理念、人材育成システム、マネジメントなど、日本の経営管理の優れた点を講義や企業訪問から学び、人材育成についてはかなり理解が深まってきた。ただ人材育成の研修は座学が多く、研修参加者にもいくらか疲れが見え始めていた頃、人材育成とともに本研修のもう一方のテーマである、プロジェクトマネジメントの事例視察に滋賀県高島市を訪問した。

高島市は琵琶湖の西部に位置し、2005年1月、マキノ町、今津町、朽木村、安曇川町、高島町、新旭町の5町1村が合併し、新市高島市として踏み出した。この中の1つ、安曇川町は以前から地場産業として扇骨が有名であったが、扇の需要が減少し新たな地場産業を模索していたところ、ニュージーランドで多く栽培され欧米では人気のあるボイズンベリーが日本ではほとんど栽培されていないことがわかり、これを新しい地域の名産にできないかと研究を始め、昨年6月に2回目の収穫祭を実施できるまでになった。



アドベリープロジェクトで説明を聞いている様子。
農園では畑の中まで入り込んで丁寧な説明を受けた。

■販売店や農家を訪問

まずはアドベリーを使った菓子を販売している「とも栄」の店舗を訪問した。アドベリー特有の甘酸っぱい香りを体験した後、研修参加者達は菓子を買いはじめた。和菓子が珍しいらしく、いろいろな菓子を買っていたが、なかでも某漫画で有名などら焼に人気集中していた。この漫画はマレーシアでも子供達に大人気だとか。続いて「道の駅藤樹の里あどがわ」を訪問した。道の駅は、国土交通省と地方自治体が連携して取り組む事業で、道の駅事業でも地域プロジェクトを学べたようであった。

次に向かったのは、アドベリーを栽培している農園である。残念ながらこの時期は栽培期ではなく、実物を見ることはできなかったが、畑の様子や、温室の様子、実がなっている写真等の説明を受け、実感が湧いたようであった。

■高島市役所では熱烈大歓迎

午後からは高島市役所を訪問した。ここでは海東英和市長以下、多くの市職員の熱烈大歓迎をうけ、研修参加者一同大感激。市役所内を案内していただいたが、日



熱烈大歓迎を受けた高島市役所にて、
市職員の方々と研修参加者一同で記念撮影。

本のオフィスで実際に働いている場面を見たがっていた研修参加者には、予期せぬ嬉しい見学となった。それにしても、玄関で受けた歓迎の大拍手は研修参加者らには生涯忘れ得ぬ思い出となったことであろう。

■関係者と素晴らしい意見交換

その後、高島市商工会へ移動し、プロジェクトに関わった方々との意見交換を行った。アドベリー生産協議会の梅村会長、前安曇川町長の福井氏、奈良県立大学の松田先生や高島市職員の方から、このプロジェクトの目的や経緯、実施状況の説明を受けた。民間の方がプロジェクトを推進し、行政が支援を行い、大学が品種改良の研究を進めていて、産官学がうまく連携しながらプロジェクトが遂行されている状況に、研修参加者達は大いに感心し、学ぶところが多かったようである。研修参加者からは質問や意見が数多く出され、活発な意見交換会となった。帰りには再度「道の駅藤樹の里あどがわ」に寄り、土産物だけでなく農産物も買い込んで帰った。

研修の終盤に、このような充実した一日が送れたことは大変有意義であった。それが証拠に帰路のバスでは、照明を落として全員気持ちよさそうに熟睡していた。

お世話になりました、高島市の皆さん、ありがとうございました。

—国際交流部 担当部長 武居 毅

マレーシア人事経理初任行政官研修

- ◎実施期間 2006.11/21～12/8
- ◎研修参加者 マレーシアの行政機関に勤務する初任行政官 20名
- ◎委託元機関 独立行政法人 国際協力機構（JICA）大阪国際センター
- ◎内 容 人材育成・プロジェクトマネジメントに関する講義・訪問・演習・意見交換

お世話になった方々、企業・団体他

（講義・訪問順・敬称略）

滋賀大学 小田野純丸教授、大阪国際大学 谷川寛講師、立山工業、人事院、まちづくり三鷹、日本通運、関西電力、阪急電鉄、岡村経営事務所 岡村昭代表、松下電器産業歴史館、松下電器産業人材開発カンパニー、奈良県立大学 松田幸夫講師、アドベリー生産協議会、とも栄、道の駅藤樹の里あどがわ、永田農園、高島市、高島市商工会



中国西部地域の中小企業振興を支える研修参加者たち

[中国中小企業振興コース]

研修参加者は中小企業を指導する立場にある中国西部各地域の生産力促進センターの責任者クラス8名に加え、中央とのパイプ役として北京の国家科学技術部から2名の合計10名で構成された。10名中6名が女性で、顔合わせ早々から華やいだ雰囲気での幕開けとなった。メンバーの所属地域は、シルクロードで知られる西域に連なる陝西省、青海省、新疆ウイグル自治区に加え、チベット及び広西チワン族自治区並びに直轄市の重慶で、一見して純粹素朴で好感が持てる顔ぶれであった。一方、団長は北京科技部高新技术發展産業化司処長の徐祿平氏で、以前にも当財団がお世話になっていて実力と人望を併せ持った人物で、リーダーとして適任であり大歓迎であった。また、研修プログラムに対してはメンバーの多くから前評判が上々で期待が大きく、それだけにわれわれ受け入れ側としては、良い意味でのプレッシャーとなった。



■各地域を代表する責任感と熱意

導入教育として日本理解プログラムを終えたあと、カントリーレポートの発表に入ったが、全員気合が入っており、それぞれ各地域を代表して参加している責任感や熱意が感じられた。今回の研修では、彼らの立場に近い地方自治体やその関連機関の訪問(大阪、東京、神奈川、京都、三重)を増やした。その中で特に印象に残ったのは、かながわサイエンスパークの形態や規模の大きさと、京都府が取組中の試作センターで、具体的施策への関心の深さを示していた。また今研修の目玉としてシャープ亀山工場で一躍世界的に有名となった亀山・関テクノヒルズの見学を組み込んだ。残念ながら工場内部は非公開であったが、亀山市と三重県庁で開発にまつわる苦労話等お聞かせ頂き、地域振興の成

功例として研修参加者の刺激になったと思う。

最終のアクションプラン発表は、土日ははさんで十分時間を掛けた甲斐があり、総じて彼らのマジメさが現れた立派な発表で、帰国後の現地での効果発揮に大いに期待したい。

■二胡の演奏にウイグル地方の踊り

研修期間中にメンバーの内3名が誕生日を迎えたことで、誕生会にかこつけた宴会で酒を数十本空けたとか、三重県行きのバスが交通渋滞で4時間ほど掛ってしまった中での、カラオケ伴奏なしの大歌合戦や、最後の懇親会でJICAの西村氏が披露された二胡の演奏に合わせ、ウイグル地方の踊りが始まったりとか、とにかく明るく元気なメンバーで、おまけに滅多に聞けない中国西部の面白い話も聞くことがで

き、個人的にも興味深い研修であった。今後も本テーマは継続されると思われ、より研修参加者のニーズに応え、現地の中小企業振興ひいては地域振興に役立てるよう、今回の内容を反芻し研修プログラムの更なる充実を図りたい。

—国際交流部 担当部長 稲本 治朗



アクションプラン発表会では、土日ははさんで十分時間を掛けた甲斐があり、総じて彼らのマジメさが現れた。

中国中小企業振興コース

- ◎実施期間 2006.11/8～12/5
- ◎研修参加者 中小企業を指導する立場にある中国西部各地域の生産力促進センターの主任クラス(組織のトップ)8名に加え、中央とのパイプ役として北京の国家科学技術部から2名の合計10名
- ◎委託元機関 独立行政法人 国際協力機構(JICA) 大阪国際センター
- ◎内 容 中小企業振興

お世話になった方々、企業・団体他

(講義・訪問順・敬称略)

神戸大学 石原享一教授、松下電器歴史館、松下電器パナソニックセンター大阪、中小企業ベンチャー総合支援センター、神戸市外国語大学 近藤義晴教授、龍谷大学 松岡憲司教授、JMP、金型経営研究所 岸本代表、亀山市役所、三重県庁、大阪観光大学 鈴木勝教授、大阪府庁、中小企業基盤整備機構、東京都中小企業振興公社、かながわサイエンスパーク、マイクロ化学技研株式会社、中小企業大学校、大阪市立工業研究所、新生紙化工、京都府庁、京都信用保証協会、サミットラボ 杉村光二代表、大阪ガス本社、ダイキン工業堺臨海工場、西陣織会館、サントリー京都ビール工場、大阪府中小企業再生支援協議会

中国西部の面白い話

- チベットの人は“下界”に下りてくると空気が濃すぎて2、3日朦朧としているらしい。
- ウイグルの名物は、一黒一白一紅といって、魷物、木綿、トマトだそう。また、ウイグルは日照時間が長いので作物が豊富で特にハミ瓜が有名。但し他地区の人に言わせると“甘すぎる”と不評。
- 青海省は知名度が低い、チベットへ行くにしてもウイグルへ行くにしても必ず通る交通の要衝。
- 広西チワン族自治区は、西部地区で唯一海に面した地域で、魚の養殖に取り組んでいる。その研修参加者は北海市という所から来ていたので、「中国で最も南の海なのに何故北海市という地名なのか?」と質問をしたら、「海の北に町があるからだ」と。確かにその通りであるが本当かな?
- 陝西省宝鶏市から来た研修参加者の苗字が「第五」という珍しい姓なので謂れを聞いたら、漢の建国時、斉王朝の田氏の人数が多かったため8つに分類し、その5番目を「第五」という姓にしたが、その後この家から有名人が輩出され今日に至っているとのこと。従って貴族の末裔か?! といった具合…。



関西プログラムで訪問した大阪城。
(中央が筆者稲本)



文化の違いを乗り越え、生産性向上活動の導入を目指す

[アンデス共同体生産性向上コース]

ボリビア、コロンビア、エクアドル、ペルー4カ国の公的機関や企業家協会の中堅職員が、各国に生産性向上活動を実施導入するにあたって、日本の生産性向上に対する取組など事例を学ぶ研修に参加した。研修中盤に元JICA専門家のナカムラエンジニアリングサービス中村代表に「中南米諸国の生産性向上活動の実際」と題して講義をいただいた。中村専門家は、コスタリカを中心とする中米諸国や、タイ、マケドニア、モルドバなどで生産性向上活動のご経験をお持ちで、現地でのご経験を踏まえた講義内容は研修参加者にも大変参考になったようだ。質疑応答も活発で、講義後も質問が寄せられた。以下中村専門家からのメッセージと研修参加者の声を紹介する。



中村 秀夫 氏

.....
ナカムラエンジニアリング
サービス 代表

研修生に、帰国後の彼等の活動に役立つような情報・知識を与えるために、筆者の3年強に及ぶ中米コスタリカにおける生産性向上プロジェクトの活動事例の紹介と、質疑応答を行う半日間の機会を得た。そこで感じたことを含めて以下に簡単に記してみたい。

■生産性向上活動導入への手がかり

事例紹介の眼目は、日本的な生産性向上活動の特徴とその背景を理解してもらうこと、質疑応答においては、研修生が帰国後に、日本で学んだこの活動を成功裏に夫々の国において実施導入するための要点を議論して、明らかにすることであった。各国における導入に対する障害や問題点を少しでも排除し、解決することに役立てたいと考えたからである。

筆者のタイ、マケドニア、モルドバ、中米諸国などでの生産性向上活動から得た知見は、「日本的なこの活動は、彼等にとってはまさに文化の違いを実感し、戸惑いを覚えると共に、同時に新鮮なある種の好奇心

が刺激されるようだ」ということであった。言い換えれば、実施導入するための枠組みを構築し、実際に成功体験を感じさせることができれば、文化の違いを乗り越えて、喜んで活動に参加するということである。

そのためには、日本的な活動の大きな2つの特徴「全員参加」と「チーム活動」を特に経営者に理解してもらう必要がある。そして成功のための鍵である「経営者の指導力」と「優秀で前向きな実施担当者の選定」を担保できれば、すでに80%は成功したと考えてよい。2つの特徴を体得する手段としては5Sの実践が有効であり、5S活動がすべての活動の基盤となる。

これらのことを筆者の体験をもとに具体的に紹介して、質疑応答を通じて意見交換を行った。彼等が懸念している各国における導入への障害や問題点に対応するための手がかりは、与え得たと自負している。

研修生は極めて前向きであり、質疑応答も活発に行われた。講師としては大いに満足できた。これは、それまでの講義や工場見学が彼等をその気にさせたからだ、関係した皆様方の努力に敬意を表したい。

■PREXにも「生産性向上活動」支援を期待

PREXも既に16年をこえる歴史を有すると聞くと、相手先の要望をよく確認し、マンネリに陥ることなく、日本的な生産性向上活動の特徴とその背景を十分に認識した研修コースを企画し、またその長所と短所を理解して、研修生に誤解を与えないような実施計画を策定すべきであると考え。日本のこの活動への啓蒙と支援に対する諸外国の期待は、貧困撲滅の観点からも極めて高く、PREXへの要請も今後とも後を絶たないと信じるからである。

研修参加者の声



<ペルー>

マリア・ルスさん

皮革履物関連産業技術
革新センター研究所
主任

ペルーで、3ヶ月の間、週に1回企業に赴き、5Sのデモンストレーションをして生産性向上活動の浸透を図ったが、うまくいかなかった。中村専門家には、中米の企業で5Sを推進する過程で、どのような問題が生じたか、その問題をどのように克服したか、詳しく教えていただき勉強になった。



<ボリビア>

ファビさん

生産性競争力ユニット
連携強化コンサルタント

中村先生は、エクアドルに関する事業で、現地政府に対し、生産性向上の取組みについてレポートも出されている。講義後、私も読ませていただいた。現在、政府組織の立場から、企業の生産性向上に取り組んでいるが、ボリビアも、エクアドルと同じく農業国であるため、先生のお話は大変参考になった。

アンデス共同体生産性向上コース

- ◎実施期間 1/22～2/9
- ◎研修参加者 ボリビア、コロンビア、エクアドル、ペルーにおいて、企業の生産性向上に関わる公的機関や企業家協会の中堅職員 合計10名
- ◎関係機関 独立行政法人 国際協力機構（JICA）大阪国際センター
- ◎内 容 生産性向上運動、生産管理・品質管理、問題解決手法、経営品質向上など

お世話になった方々、企業・団体他

(講義・訪問順・敬称略)

大阪国際大学 谷川講師、サミット・ラボ 杉村代表、関西生産性本部、関浦中小企業診断士、イーシーテクノ、パナソニックセンター大阪、中農製作所、ダイキン工業、コープこうべ甲アイランド食品工場、国際機関APO、ナカムラエンジニアリングサービス 中村代表、平和工業、サンレー冷熱、住友電気工業、パトライト



サンレー冷熱のみなさんと。

事務局
ニュース

◎ 3月16日にPREXシンポジウムを開催！

シンポジウム「新時代における人材交流—関西の魅力を生かした新しい渦の創造—」を開催いたします。

◎日時・場所

2007年3月16日(金) 13:30~17:30
pia NPO 6F大会議室

◎プログラム

- ・基調講演「なにわの歴史から見た大阪の特色・魅力」
大阪歴史博物館 脇田修 館長
- ・パネルディスカッション「関西の特色・魅力を生かした、これからの時代の国際交流、人材交流の方向を探る」
コーディネーター：
大阪大学大学院国際公共政策研究科 高阪章 教授
パネリスト：
「経済界の国際交流」
関西経済連合会 青柳明雄 常務理事・事務局長

「観光、コンベンションでの国際交流」

大阪国際会議場 山下和彦 顧問

「NPOによる国際交流」

関西国際交流団体協議会 有田典代 事務局長

「自治体による国際交流」

大阪市長室 木村勇 国際交流担当部長

コメンテーター：

PREX会長 井上義國、他

※詳細はホームページ(<http://www.prex-hrd.or.jp>)をご覧ください。皆さま方のご参加をお待ち申し上げます。

3月実施の主な研修

- 広西チワン族自治区中小企業視察団 …… 3/18~20
- ケニア貿易振興 …………… 3/20~30
- メコン地域観光振興 …………… 3/21~30

C O L U M N

命の現場の最先端を支える人たち

国際交流部 コースリーダー 高山 真由子

「救急・大災害医療セミナー」という研修がある。産業振興関連の事業が多いPREXでは、少し趣が異なる内容だ。世界各国で救急医療・災害医療に携わる医師や行政官が、日本の救急・災害医療システムを学ぶとともに、医療関係者間のネットワークを構築することを目的として参加している。

幸いなことに、私はこれまでにこの研修を5回担当し、命の現場を支える世界各国および日本の医療関係者が、いかに真剣に仕事をしているかということを知ることができた。

トルコの研修参加者は、レスキュー隊の救急医療チーム長で、様々な災害現場に真っ先に駆けつけて、医療処置を行っている。

2003年、彼のチームがバグダッドに派遣され、救急救助任務に就いていたとき、国連事務所の爆破事件が起きた。彼がいた場所からほんの200メートル先で、きのこ雲が立ち上がる、もの凄い爆発だったそうだ。私は思わず、怖くないの？と聞いた。彼の答えは、「怖くない。これが僕の仕事で、僕はこの仕事が好きだ。バイタルサイン(人の生きている証としての脈拍・心臓音など)があったら、どんな状況化でも助けずにはいられない。一度現場で救助の体験をすると、この仕事の魅力にはまってしまう。」

インドネシアの研修参加者は、帰国前のプレゼンテーションで、最後に以下の言葉を発表してくれた。

“The world can satisfy our needs, but not our greed. We live in an island called earth. If you love your future generation, start preparing a healthy environment for them now while you still can do it.” (意識：この世界は、私たちの欲望を満たすことはできないが、ニーズを満たすことはできる。私たちは、「地球」という一つの島に住んでいる。自分の子どもたちの世代を愛するのなら、彼らのために、健全な世界を準備しはじめよう。今ならまだ、できることがある。)

こういう高い意識、使命感を持った人たちが、世界中で、命の現場の最先端を支えていることは、本当に心強い。

今後、自然災害や人的災害が少しでも減っていくことを願うとともに、救急医療の現場に飛んでいく医療関係者の安全を心から祈りつつ、私も自分の置かれた場で、同じ意識を持ち、行動していきたい。



研修中に参加した「大阪千里メディカルラリー」にて。

PREXの
研修実績

2007年
1月末現在

PREXは、1990年4月設立以降、開発途上国の人材育成事業と、その活動を通しての国際的人材交流促進に努めています。

●研修累計(1990~)

323コース

●受講者累計(1990~)

110カ国・地域 10,134名

【受入(訪日)研修 3,073名/
海外研修 7,061名】

●2006年度計画

44コース 1,267名

【受入研修 31件/海外研修 8件/交流事業 5件】

●2005年度実績

35コース 1,167名

【受入研修 25件/海外研修 9件/交流事業 1件】

編集・発行

財団法人 太平洋人材交流センター
専務理事 三田 昌孝

〒552-0021 大阪市港区築港2丁目8-24
pia NPO 5階 502号室

TEL 06-4395-2650
FAX 06-4395-2640

ホームページ: <http://www.prex-hrd.or.jp>
電子メールアドレス: prexmail@prex-hrd.or.jp